

2019
おもろ
チャレンジ

芸術的視点から環境問題を考える： アート作品の制作を通して

経済学部 2年

片倉 七海

英国、ドイツ

2019年9月16日-

2019年10月8日



渡航概要と内容

渡航概要

芸術の観点からみた「環境問題」に対する理解を深め、ゆくゆくは環境問題が深刻であるということをも人々の心に訴えかけるアート作品を作るためにおもろチャレンジに参加しました。「環境」という人間が共存していくべきものを対象にする「環境問題」を解決するにあたって、物質的で学術的な価値観だけで環境を捉えるのではなく、人間的で芸術的な価値観も活用し、より多くの人に環境問題を伝える必要があると思ったからです。芸術と環境問題に対する理解が深く、世界でも環境芸術が進んでいるイギリスで、アートの世界と学術の世界での環境問題に対する考え方、価値観、そして伝え方の違いを考察しました。

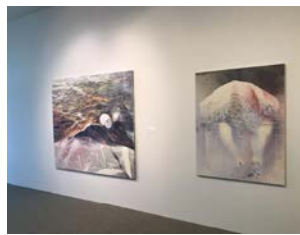
現地での活動

現地では、美術大学の前で美大生インタビューをし、アートフェアやイベントに参加することで現地のアーティストやイラストレーターに対してヒアリングを行いました。そこでは、環境におけるアートの意義やそもそもアートとは何なのか、という根源的な議論まで行うことができました。また、ベルリンでは植物園内で行われていた「エコロジー」をテーマにしたアートエキシビジョンに行き、実際に環境問題を訴えている作品の展示をみることができました。そこで、アート作品を作るにあたってのインスピレーションを得ることにつながったと感じています。他にもイギリス(ロンドン、ブリストルなど)とベルリンにある20以上のモダンアートの美術館にいき、環境を題材にした作品を実際にみて感じる事ができました。

ロンドンの SAATCHI GALLERY で開催されていたアートフェアの様子です。イギリスでは、アートフェアは富裕層だけでなく家族や学生の観覧の場でもあり、様々な年代のお客さんにより作品が次々と売れていきます。芸術作品が身近である現状を体感できました。また、前期のゼミ活動で日本と欧州のアートマーケットについて勉強していた私にとって、現地のアートフェアに実際に行けたことは大変刺激的でした。



ベルリンでのエコロジーをテーマにした展示の一部です。今回の旅で唯一、環境問題をテーマにした作品のみを集めた展示でした。この時ベルリンでは環境問題を政府に訴えかける大規模なデモが行われており、その影響もあり、このような展示を見る機会がありました。実際に芸術というメディアを使って何かを訴えようとする作品を現場で感じることでインスピレーションを得ることができまし



た。環境を題材にしても、温暖化や生物多様性、汚染など様々な問題意識を抱えて生まれた作品が並んでおり、そのメッセージ性も直接的なものもあれば、一見よくわからないような間接的なものもありました。ただ、何かを感じさせるアートというのは共通して印象深く、パワフルなものがあり、感情に揺さぶりかけるのだなと感じました。これは、この展示だけに限らず、他の様々な展示やアートフェア、美術館に行って感じたことだと思います。そのような作品を作るには、強い問題意識と知識、またメッセージが伝わるようなアートのスキルとテーマにあった題材の選択のセンスが必要であると改めて感じました。

ロンドンの Tate Modern では「Can Art Create Change?」というテーマで展示が行われており、環境問題や移民問題など様々な社会問題とアートを融合させて作品を展示していました。このような展示はイギリスに多くありましたが、特に TateModern



のものは、作者のインタビューや 作品の説明が大変効果的に伝えられており、大変勉強になりました。

また、ベルリンの印象深い展示としては、コルセットに魅了された女性アーティストの展示でした。女性のコルセットに着目し、女性の美やジェンダーの問題における矛盾をシニカルに、そして美しく表現した展示でした。



ロンドンから一時間半ほど移動したブリストルという町は、ロンドンと雰囲気が大きく異なります。少し尖った、若者の街です。雰囲気はどちらかというとベルリンに近く、町中がストリートアートに溢れ、夜になるとジャズやヒップホップが聞こえてくるような活気のある町でした。ここでもモダンアート、特にメッセージ性の強いアートが盛んでした。大学生でたまにジャズバーでジャズを歌う写真の彼女は、ジェンダーの勉強をしており、フェミニズムに関するとても良い展示を紹介してくれました。環境問題とは違うが、同じ社会問題を訴える作品として多くのものが展示されていました。その作品の一つに「環境問題を訴えるフェミニストの顔」という作品があり、歴史上では環境問題を訴えるフェミニストが多くいて、その多くがフェミニズムと環境問題の双方の領域において多大な影響を与えたことを知りました。日本では、「フェミニズム」という言葉に対し、批判的な印象を抱く方が多い印象がありましたが、ロンドンやブリストルではフェミニズムへの関心が非常



に



に高く、街全体を通してフェミニズムへの理解が深いと感じました。同時に、環境問題に対する消費者意識も非常に高く、環境のためにベジタリアンになる学生が大変多くいることも驚きました。環境問題に関しては、「お互いに監視し合ってる感じがある」と、写真の彼女は言っていました。このような消費者意識の違いや、社会問題に対する感度の高さは日本と大きく異なるなと感じました。



アートをみて学ぶ他に、実際に絵を描いたりアーティストと話したりする機会も多くありました。

インスタグラムで見つけた、カフェで絵を描くコミュニティを見つけ、隙間時間に行ってみた日がありました。そこでは、美大生や美術に興味のある若者から、イラストレーターやアーティストを職にするプロの芸術家まで多様な「アーティスト」が一緒に和気藹々とコーヒーを飲みながら絵を描いていました。描く対象は様々で、主にカフェから見える景色を水彩や鉛筆、ペンで描いていました。おしゃれなカフェが多く、ゆったりとした時間が流れているためみんな自分のペースで絵を描き、おしゃべりをしていました。絵をみんなで描いた後、イラストレーターの方々とお話しさせていただき、アートの意義や作品が社会に与える影響について語り合いました。



また、ベルリンではアートブックフェアが開催されており、アーティストや編集社がアートに関する本を売るイベントが開催されていました。中には東京のアートブックの編集社も参加していました。編集社がブースを持つ場合もあるのですが、個人で本を出版したアーティストも数多くおり、彼らと長い間作品や本のことに関して話す機会も多くありました。



た。環境問題に目を向け、環境問題を解消する消費者行動を毎日ひとつずつ提案するスケジュール帳を売っているアーティストの方と環境と芸術について話す機会もありました。

また、ロンドンで、千円で三時間ほどモデルと講師付きで絵をかけるクラスにも参加し、初めて裸体をかき経験もできました。日本では裸体のモデル付きで絵をかき機会など、美大生以外なかなかないのだが、イギリスではこれを毎週行っており、誰でも簡単に参加できるのです。そこで figurative drawing の基礎を学ぶことができました。この旅ではずっとメッセージ性に着目した作品をみたり、そのようなアーティストへのインタビューを中心に行っていたので、スキルに着目した経験もできたのはよかったです。この経験から日本に帰っても絵の練習を再開しようと強く思いました。



環境と芸術の関連性が強い作品に多数出会ってきましたが、特に印象深かったものは、写真家でアーティストの AIDAMULNEH さんの水の枯渇問題などに目を向けた作品の展示会でした。WaterAid が提供したこの展示は、アフリカで実際に撮影された写真であり、写真とは思えないほどの美しさと非現実的な表現が印象的でした。



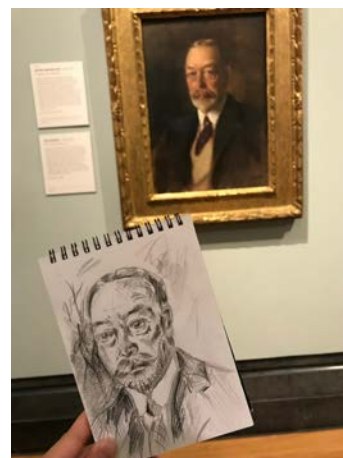
また、イギリスの伝統ある美術館の一つである Tate Britain で第一日曜日だけ夜間で展示会をするイベントが開催されていることを知り、イベントに参加しました。そのイベントは想像以上に若者に人気で、壁いっぱい飾られた西洋美術の前に DJ とバーカウンターを置き、ワインを嗜みながら幅広い世代の方々が夜を楽しんでいる光景が大変印象深かったです。中でも特別展示の一部は、整理券が配られるほどの人気で、その存在を知らなかった私はそこで出会った女性の方に整理券をたまたま譲ってもらい、入ることができました。その展示は私が想像していたアートの展示とは全く異なるものでした。



ヒッピーの作者が大学時代にイギリスの高速道路の橋の下で行っていたパーティーを完全に再現したもので、展示室に入ると巨大な橋が天井いっぱい建てられています。そこで、作者は詩を読みながら、ダンサーたちがダンスをし、展示を見に来た人々に話しかけたり、一緒に踊ったりするのです。その空間自体が一つの作品になっていたのです。私は、このようなアートの形に初めて出会ったので、大変新鮮でした。日本でこんなにも活気のある美術館は中々な

と思います。アートが身近に感じられるイギリスでのアートの価値観にまたしても魅了された一夜でした。

最終日には、National Portrait Museum へ足を運び、数え切れないほどの肖像画を見てきました。その中で、ある団体が椅子を持って、絵を書いている光景をみて、自分も少しだけ参加しようと思いつき、椅子を借りれるかどうか聞いて見ました。椅子は美術館が無料で貸し出しているもので、私もその団体に混ざり肖像画のコピーをしながらか、参加者たちとコミュニケーションをとりました。美術館で気軽に絵をかける、それも実際の絵の質や重厚感を肌で感じながら絵をかける環境は貴重で、日本でも是非取り入れて欲しい文化だと感じました。私は、高校時代、肖像画を多く書いていたのですが、この旅を通して、やはり自分が書きたいと思うものや、自分が惹かれるアートの多くは人間が描写されており、もし、自分がアート作品を作るとしたら肖像画を描きたいと思いました。その場合、ブランクが長いので、練習の必要があるなとひしひしと感じました。



ていたのですが、この旅を通して、やはり自分が書きたいと思うものや、自分が惹かれるアートの多くは人間が描写されており、もし、自分がアート作品を作るとしたら肖像画を描きたいと思いました。その場合、ブランクが長いので、練習の必要があるなとひしひしと感じました。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

環境問題に対する消費者意識の高さに根本的な違いを感じました。環境問題に対して、消費者同士がお互いを監視しているような感覚がありました。例えば、現地で出会った生物学を学ぶ大学生は、もともと肉を食べることが大好きだったが、生物学のフィールドに入ってから周りにベジタリアンしかおらず、肉を食べづらくなったという。毎週末は、肉以外のものを食べるように心がけるようになったそうです。肉を食べることは、環境に悪く、環境に対する意識が低いとされるのだ。また、ブリストル大学で泊まらせてもらった大学生6人のシェアハウスでも、リサイクルをしない一人の男子学生に対して文句を言っており、他のシェアメイトたちがゴミの分別を積極的にしていた。京都では、私の周りの大学生でリサイクルを実際に細かくしている人はあまりいないように感じる。イギリスでは、環境問題を自分たちの問題として捉えており、環境問題を他人事のように扱う人や、実際にアクションを起こさない人を見下すような雰囲気を感じた。

アートとは何かということに対しても、様々な知見が得られた。アートを表現の方法であるという人、アートは自分自身であると考えている人、休息であるという人、体の一部であるという人。どれもアーティスト自身と密接な関係にアートは存在するよう感じられました。アートが生活に密接に存在するという価値観の元で、学生はほとんど無料で様々な美術館で芸術に触れ合える環

境の中で生み出されるアートは、日本で同じ作品を見ることと一味変わった良さがありました。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の3週間で芸術作品を作るために必要なプロセスや、考え方、そしてスキルを身を以て経験できたと感じています。例えば、ベルリンとロンドン、ブリストルではそれぞれ違った街並みの「色」があり、建物や植物、人間に使われている色が微妙に違うのです。よって、それぞれの街で作られたアート作品には、各々の街のカラーが現れています。周りの環境や何気ない雰囲気は自分の作品に現れることがあります。しかし、それを自分ではあまり意識したことがなく、渡航中は日本の「色」、特に今住んでいる京都という美しい街並みがもつ「色」とはどのようなものなのかを帰ったら考えたいと思いました。今、京都に帰ってきて、日本の四季がもたらす京都の街並みにははっきりとした色が少なく、落ち着いた、自然的な色に溢れており、それが建物や人工物のデザイン、街並みに現れているように感じました。京都がもつ「色」を活かして、独自の感覚と感性を持ってこれからもアートを作りたいなと思った。

環境と芸術の関わりに関しては、自分が当初考えていたものとは少し違う気がします。私は、渡航前は芸術とは表現の方法、つまり言語のように考えていました。このようなアートのあり方ももちろん存在し、コミュニケーションアートという形式で、多くのメッセージをアートが伝えています。(実際にブリストルやベルリンの美術館やギャラリーではこのようなアートが非常に多く存在した)しかし、芸術とはそれよりももっと根本的な意味もあるのではないかと考えるようになれました。アートを環境の一部として捉え、作品を作ることもできるのではないかと考えるようになりました。このような芸術に対する新しい感覚は、今後アート作品を作っていくにあたって活かされると考えます。

本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

普段から多くの人に積極的に話しかけ、機会を掴んだり、新しい考えを得たりすることを心がけるといいと思います。おもしろチャレンジでは、想像以上に自主性が試されます。受動的な態度だと、何も得ないまま3週間が過ぎてしまうことも大いにあり得ます。規定されたプログラムも大学も組織もない中、3週間の空白の時間をどのように有意義に埋めていくかは、一見自由で楽しいことに感じられますが、実際はかなり難しい作業です。そんな時、現地で出会う人や、街中で見かけるフライヤーなどから得ることができる情報は、普段からそのような情報に敏感でないと見出せない機会であると思います。

主な奨学金の使途

*渡航費

*現地滞在費、食費、活動費、交通費

*宿泊費

*海外旅行保険料